

聖地のこどもニュース

オリーブの木

当法人(青少年国際交流プロジェクト)
20周年記念

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋
PROJECT 2025

平和の架け橋プロジェクト2025
報告を掲載

No. 98

2025年10月



プロジェクト2025の一コマ。「恵の丘原爆ホーム」訪問：今年も【平和の架け橋プロジェクト】で次世代の平和を担うイスラエル・パレスチナ双方の若者が、日本の学生とともに集まった。(報告書は8ページ以降)

ようやくイスラエルの人質は愛する家族のもとに帰ることができました。ガザでは空爆の音が聞こえなくなり、緊急支援物資のトラックが入れるようになりました。しかしこの停戦が守られるか、何の保証もありません。6万7千人の命が奪われ、その三分の一は子どもだと言われています。残されたのは原型をとどめないほど破壊された街、愛する人を失い生きるすべを奪われた人々です。しかもこれからガザは雨期になり、寒い冬が始まります。ハマスの武装解除はされておらず、停戦発効後の13日にガザの内部抗争で30人近くが死亡するような状況で、彼らはどのように生活を再建していくのでしょうか？

国際社会からの人道支援がなければ、命を繋ぐことができません。食料や医療など生活必需品は欠かせませんが、学校教育の再建も大切な課題です。将来に責任を持つ子どもたちが、親や兄弟を失い、飢餓にさいなまれるという苦しみを体験しています。彼らがきちんとした人間教育を受けなければ、「自分たちをこんな目に遭わせた敵」と信頼関係をつくるのは難しいでしょう。真の和平のためには、お互いを「同じ尊厳を持つ人間」として認め合うこと、それを可能にする教育環境が必要です。これからも皆様と力を合わせて、今助けを必要としている人々への支援を少しずつでも続けていきたいと思っています。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名
「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

家が、学校が、尊厳が「破壊」される日々

イスラエルの「集団懲罰」に非暴力で抗うパレスチナの人々がいる

記事：三井 潔（共同通信編集委員） 写真：金子卓渡（共同通信写真記者）

パレスチナ自治区ガザで、イスラエルとイスラム組織ハマスの戦闘が始まって10月7日で2年となるのを機に、大きな動きがありました。トランプ米大統領のガザ和平提案を受け、ハマスが生存している人質全員を解放し、イスラエルとの停戦が実現しました。和平への一歩となることが期待されますが、実現には厳しい道のりが予想されます（10月14日原稿執筆時）

イスラエルの友人は「これを機会に『戦争継続国家』に終止符が打たれ、パレスチナとの和平交渉が始まってほしい」と話していました。イランをはじめレバノンの武装勢力ヒズボラやイエメンのフーシ派など「敵対勢力」と常に戦争を続けているネタニヤフ政権のやり方に閉口していたからです。パレスチナの友人は、今回の動きを歓迎し「イスラエルがガザでの虐殺を止めるだけでなく、パレスチナへの迫害をストップしてほしい」と切実な思いを吐露してくれました。

目の前で始まった空爆

私は今年8月下旬から9月初めにかけて、イスラエルとパレスチナに取材のため足を運びました。現地で目の当たりにしたのは、圧倒的な軍力を持つイスラエルが、ハマスと戦闘を続けていたガザだけでなく、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸全域でも弾圧を強化している現実でした。イスラエルによる「集団懲罰」とも言える圧政に非暴力で抵抗するパレスチナの人たち、そして隣人との共存を模索しようとするイスラエルの人たちと出会い、勇気づけられました。

9月初め、ガザを1[＊]。先に見下ろすイスラエルの丘を訪ねました。地中海に沈む美しい夕日が浮き上がらせたのは、がれきと化した街です。日が暮れると、



イスラエル側の丘から、がれきと化したパレスチナ自治区ガザの街を望む（2025年9月）

イスラエル軍の「ハマス掃討作戦」が始まりました。砲撃の音がして、黒煙が上がり、戦闘ヘリからの機銃掃射が見えました。

ガザ住民の犠牲がこの2年で、6万7千人を超え、飢餓に苦しむ住民がいる惨状が脳裏をよぎります。「あそこにハマスの戦闘員がいるのだろうか」「女性や子どもたちが巻き添えになっていないだろうか」。間近で始まった攻撃を見て、廃虚の中で逃げ惑う人々の心情を思うと、胸が痛みました。

深く、長い対立

多くの困難が立ちはあるパレスチナ和平の打開への課題は何でしょうか。私はイスラエル側に大きな責任があると考えます。パレスチナを蔑視する極右の閣僚を取り込んだネタニヤフ政権が、憎悪を生む「敵視政策」に歯止めを打つことが肝要です。

そもそも双方の対立は、2年前のハマスの奇襲が起点ではありません。ヨルダン川西岸では、国際社会が違法と断じるイスラエルの入植地拡大が加速化しています。イスラエル軍や入植者による、パレスチナ住民への弾圧も続いています。

欧州での迫害を受け、ユダヤ民族の「故郷の地」で、国家づくりを目指そうと18世紀後半に始まったシオニズム運動。75万人とも言われるパレスチナ難民を生んだ1948年のイスラエル建国。深く、長い対立が解消されていません。そもそもガザは、2005年のイスラエル撤退後も厳しい封鎖が続き「天井のない監獄」と言われていました。

2年前に始まったガザでの戦闘後、西岸でも「対テロ」を名目とした軍事作戦などで、パレスチナの犠牲者が約千人に上っています。こうした事実は、日本ではあまり知られていないのではないのでしょうか。家屋や学校、生活インフラが破壊され、命を奪われる日々をパレスチナ人は送っています。

射殺容疑の入植者2日で釈放

「公平と正義」がないがしろにされている象徴的な出来事がありました。西岸南部にあるマサフェルヤッタで7月末、一人のパレスチナ人平和活動家が射殺されたのです。容疑者はイスラエルの入植者の男です。重機で集落の水道管を壊し始めたため地元民





イスラエルが建設した分離壁の前に立つパレスチナの子どもたち
(パレスチナ自治区ベツレヘム、2025年8月)

が抗議すると、男は短銃を数発発砲して威嚇し、その後男性を撃ち殺したのです。男はその後、どうなったのか。正当防衛が認められ数日で釈放されました。一方、非武装で抗議した地元住民20人が「脅迫」を理由に逆に拘束されました。こうした事件はこの集落だけでなく西岸では日常茶飯事です。

連日のように集落に侵入し、破壊活動を繰り返し、入植者やイスラエル軍に対し、生きる尊厳を求めて非暴力で抵抗する住民の姿に頭が下がります。古代ローマ帝国時代に井戸として掘られ、オスマン帝国時代に住居に転用されたとされる洞窟で暮らす多くの農民がいます。家屋が壊されるからです。地元で平和・人権活動を担う31歳のサラム・アドラさんは「私たちはハマスのような武装闘争の道を選ばない。SNSを通じて、イスラエルの非道びりを国際社会に訴えて正義の実現を目指す」と強調していました。こうした日常を切り取ったドキュメンタリー映画「ノー・アザー・ランド 故郷は他にない」が今年、米アカデミー賞を受賞しました。この映画を見た読者の方も多いのではないのでしょうか。

ホロコースト、ゆがんだ「被害者意識」を悪用

強硬姿勢を続けるネタニヤフ首相の思惑の背後には何があるのでしょうか。首相は、汚職などの罪で訴追されているため、政権が崩壊すれば政治生命が絶たれます。パレスチナと妥協すれば政権離脱を公言する極右閣僚が政権の要職にあり、政権維持のために戦争を継続している、との国内外からの批判があります。識者やメディアがよく解説する視点です。

ただ、もっと根深い事情もあります。親族にホロコースト（ユダヤ人大虐殺）の犠牲者を持つヘブライ大のダニエル・バルタル名誉教授に話を聞く機会がありました。ダニエル名誉教授は、約2千年前のディアスポラ（大離散）、近代東欧でのポグロム（ユダヤ人迫害）、ホロコーストを経験したユダヤ民族の深層に刻まれた、「脅威」に過剰反応する被害者意識を、ネタニヤフ首相が政権延命に悪用している、と指摘します。なぜユダヤ民族は迫害されたのか。「弱かったからだ」と言う論理です。だから「強くなければ生存できない」という倒錯した意識が働くのだと、ダニエル名誉教授は言います。

イランへの攻撃は「差し迫った核の脅威を取り除くためだった」というネタニヤフ首相の主張に、リベ

ラルなイスラエルの人たちの多くも賛意を示しました。攻撃直前に落ち込んでいた支持率は回復しました。ネタニヤフ首相の思惑通りだったのでしょうか。

ハマスに息子殺された母の願い

和平への道は遠く、やりきれない厳しい情勢の中でも希望はありました。隣人との共存を願うイスラエル人と出会いました。ハマスに息子を殺害された、72歳のリオラ・エリオンさんがその一人です。イスラエルのNGOが主催し、パレスチナ人と交流するプログラムに参加し、マサフェルヤッタを訪ねたのです。

「同胞」の横暴を知ったリオラさんは言います。「自由を求める隣人をなぜ私たちは理解できないのか。手を取り合い前に進むしか未来はないのです。私は愛する息子を過激派に殺されたという『代償』を払いました。だからパレスチナとの共存を同胞に伝える資格と使命があるのです」。リオラさんは親族にホロコーストの犠牲者がいるだけでなく、愛する長男を殺されただけに説得力があります。



パレスチナとの共存について語るリオラさん。長男をハマスに殺された。左胸の700という黄色地の数字は、ハマスの奇襲から700日目を意味する（イスラエル・テルアビブ）

現代のダビデはパレスチナ人

ハマスの非道は許されません。ただ家も家族も、学校も失った子どもたちは将来、どんな未来を目指すのでしょうか。「敵」への復讐を誓うだけでしょう。預言者アブラハムの子孫とされる二つの民族の一方は「強者」になり、「弱者」を踏みつける構図。旧約聖書で描かれた巨人ゴリアテに石を手に立ち向かった、ユダヤの名君ダビデは今、非武装で抵抗するパレスチナの人たちの姿に重なって見えます。

エルサレム大主教区からメッセージをいただきました

Patriarchatus Latinus - Jerusalem
General Administration

Proto, #: 256/2025



بطريركية القدس اللاتين
الوكالة العامة

支援金受領のお知らせと感謝（ご支援ありがとうございました）

親愛なる井上弘子様、そして NPO 聖地のこどもを支える会の皆さまへ

聖地より心からのご挨拶と深い感謝を申し上げます。

この戦争の勃発以来、多くの地域社会が甚大な困難に直面しています。ガザでは、ほとんどすべての家族が住む家と生計手段を失いました。地域全体、すなわちおよそ 85% が破壊され、食料・清潔な水・医薬品・基本的なサービスへのアクセスはほぼ不可能になっています。特に子どもや高齢者にとって、心の傷と心理的な影響は深刻です。

ヨルダン川西岸においては、破壊は目に見える形では少ないものの、苦しみは同じように深刻です。移動制限により、数千人が職場に行けなくなり、また巡礼や旅行者に支えられていた観光産業が完全に崩壊し、多くの家族が生活の糧を失いました。

この暗い時代における皆さまの揺るぎない連帯は、真の慰めであり、具体的な支えともなっています。私たちが仕える人々を代表して、NPO「聖地のこどもを支える会」の寛大で一貫したご支援に心より深く感謝いたします。皆さまからのご寄付は、家族が食料や住む場所、そしてケアを確保できるよう

に役立っています。

また、井上弘子理事長が代表する尊敬すべき貴法人からのすべてのご支援は、人道的な支援のみに充てられ、最も困窮し、深く影響を受けている人々の基本的なニーズを満たすことに使用されていることを改めてお伝えします。信仰や背景に関わらず、貴団体からのご支援は緊急食料配布、住居の修繕・提供、医療・衛生支援、雇用創出、現金給付、その他、人間の尊厳を守り生き延びるための救済活動に直接用いられており、宗教的・司牧的な活動には一切使われていません。

皆さまの信頼、思いやり、そして協力に心から感謝いたします。

その寛大さが命を救い、希望を取り戻しています。深い感謝と祝福を込めて。 敬具

サミ・エル・ユセフ
エルサレム カトリック大主教区
最高経営責任者
特定非営利活動法人
聖地のこどもを支える会
理事長 井上弘子様

2023年11月からの 当法人による緊急支援の実績

皆様からの支援金は、国際社会からエルサレム総大主教区に寄せられる支援金の一部として、ガザ、ヨルダン川西岸両地区の人々に、食料、乳幼児用品、医薬品、燃料などの物資、また教育、雇用の創出、寒さ対策などなど、様々な施策となって届けられています。

年月日	出来事と支援実績	送金額
10/7/2023	ガザ紛争の始まり	
11/2/2023	ビツァバツラ枢機卿からの緊急支援要請のアピール	
11/15/2023	送金 (1)	¥1,000,000
12/15/2023	送金 (2)	¥1,500,000
1/9/2024	送金 (3)	¥1,000,000
2/6/2024	送金 (4)	¥2,500,000
2/26/2024	送金 (5)	¥3,000,000
3/26/2024	送金 (6)	¥3,000,000
6/4/2024	送金 (7)	¥5,000,000
10/1/2024	送金 (8)	¥5,000,000
1/6/2025	送金 (9)	¥5,000,000
5/1/2025	送金 (10)	¥5,000,000
	合計	¥31,000,000

ガザ停戦で合意 イスラエル批判の高まり影響か

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラム組織ハマスが人質全員を解放し、ガザ侵攻のイスラエル軍が部分撤退する和平案の「第一段階」が合意され、10月10日にガザ停戦が発行したと伝えられました。これが次の段階に進み、恒久的な停戦につながるのか。このコラムが掲載される「オリーブの木」が皆さんのお手元に届くころに事態がどう動いているのか、お伝えすることはできません。原稿の締め切りというものがあるからです。ともあれ、今回はイスラエルに唯一影響力を与えられる米国のトランプ大統領が、停戦へ向けてこれまでになく本気の構えを見せている模様で、その背景にはイスラエルに対する国際世論が厳しさを増してきたことがあるのかもしれない。以下の記述は、ここまでに至ってきた経緯の説明と思ってお読みください。

タガが外れたイスラエル

イスラエル軍は9月9日、イスラム組織ハマスとの停戦交渉の仲介国カタールで、「ハマス幹部を狙った」攻撃を実施しました。その翌日、イエメンの反政府勢力でハマスに連帯を示すフーシの拠点がある首都サヌアなどを空爆。15日には、パレスチナ自治区ガザの最大都市ガザ市へ地上侵攻を開始と、まるでタガが外れたように武力行使にのめり込んできたイスラエル。

カタールの首都ドーハでイスラエル空軍機が市内の建物にミサイル攻撃を加えたのは、ハマスの要人殺害を狙ったもので、標的にされたのは停戦交渉団を率いていた幹部でした。ハマス側が「停戦合意に向けた機会を妨げようとしたものだが、交渉団の暗殺は失敗した」との声明を出したのに対し、イスラエル側は、2023年10月7日の奇襲を主導したハマス指導部の人物が標的であり「攻撃は完全に正当化される」と表明しました。

イスラエルはこれまでも、ハマスの最高幹部がイランの首都テヘランに滞在中に殺害したほか、レバノンのイスラム教シーア派組織ヒズボラの最高指導者を殺害するなど、数々の暗殺を実行してきました。イスラエルに敵対的な武装勢力に対する作戦を、米国は特に非難することはありませんでした。しかし今回、米国が進めようとしていたガザ停戦を仲介しているカタールでの攻撃には、さすがにトランプ大統領も「主権国家であり米国の同盟国であるカタールで攻撃することは、（停戦という）目標達成



パレスチナを支援するイスラエルNGOメンバーに退去を命じるイスラエル兵（ヨルダン川西岸地区マサフェルヤッタ、2025年8月） 写真：金子卓渡（共同通信写真記者）

の役に立たない」と批判的でした。ただし、イスラエルに対してそれ以上の強い姿勢は見せず、9月18日の国連安全保障理事会に提出されたガザ停戦決議案は、15理事国中14カ国が賛成したのに、米国の拒否権で否決されました。

ジェノサイド認定相次ぐ

国際社会では「迫害を受け続けたユダヤ民族」への同情・遠慮が薄れてきて、イスラエルへの批判が広がり始めています。9月22日に国連本部で開かれた国際会議では、フランスなどがパレスチナを国家として承認すると宣言、承認国は150カ国以上になりました。イスラエルは反発を強めるだけで、パレスチナ国家の基盤をなくすためにヨルダン川西岸のユダヤ人入植地を拡大強化する構えすら見せています。

国際ジェノサイド研究者協会という集団殺害を調査研究する団体が8月31日に、イスラエルがガザで組織的に人道に対する罪、戦争犯罪、集団虐殺を行っている、と宣言する決議を採択しました。ジェノサイドに関する世界最大の専門家組織だそうで、イスラエル政府による暴力的行為や医療従事者、人道支援者、ジャーナリストに対する意図的な攻撃や、住民の生存に不可欠な食料、水、医薬品、電力を意図的に欠乏させている、と指摘しています。

9月16日には国連人権理事会の調査委員会が、同じくジェノサイドを行ったと認定する報告書を発表しました。集団の全員または一部が破壊されるような生活環境を、意図的に強いたとして、ネタニヤフ首相らを名指しで「ジェノサイドを扇動した」と指摘しています。

専門家によると、ジェノサイドには上記のように食料や水、医薬品などを意図的に欠乏させる「飢餓ジェノサイド」のほか、「居住環境に対する虐殺」や「学術に対する虐殺」などがあります。ガザでは家の92%が破壊され、うち三分の一が完全破壊という報告もあります。また、11カ所の大学すべてが砲撃を受け、多くの学校が破壊されて何十万人もが学びの場を失っており、次世代の育成を妨げるという意味でパレスチナ人の存在を消し去るという目的があると、専門家は指摘します。それはガザに限らず、ヨルダン川西岸でも、学校の破壊や子どもらの通学が妨害されるという形で起きていることです。

「もの言わぬ米国」が支え

とはいえ、ガザの悲惨な状況のことを「何とも思わない」というイスラエル人が未だに多いようです。外からのガザ攻撃批判やジェノサイドの指摘には「2023年10月7日を忘れるな」「ホロコーストの再来だ」として、自分たちの苦しみもわかってほしいという反応です。

しかし、米国の外交政策に影響を与えてきた米外交問題評議会のハース名誉会長は「イスラエルの行動はもはや、10月7日によって正当化されません。ガザのすべてのパレスチナ人が苦しんでいます」と語ります。朝日新聞のインタビューに答えたもので、それによるとハース氏は、イスラエルが国際社会の「のけ者」になってきていることを懸念しています。そして、米国がものを言わないことにより、イスラエルの国民は代償を払わずにこの戦争を続けられると考えるようになってしまっていると指摘し、「米国はイスラエルに対してより厳しい態度で臨むべきです」と警告します。

国際社会の反応といえば、イスラエルが9月8日にガザ市制圧計画を決めたのに対し、ドイツのメルツ首相はイスラエルへの武器輸出を停止すると発表。欧州連合（EU）の欧州委員会はイスラエル政府への制裁を提案しました。これまでもイスラエルのガザ攻撃を批判してきたスペインのサンチェス首相は、イスラエルを国際スポーツ大会から除外すべきだと主張。9月14日に国内で開かれていた自転車ロードレースが、イスラエルを拠点にするチームの参加に抗議するデモ隊の妨害で中止になった際、この抗議行動を称えました。また、フランスのマクロン大統領は、パレスチナ国家を承認する方針である

ことに対しイスラエルのネタニヤフ首相が「反ユダヤ主義の火に油を注ぐ」と非難すると、「反ユダヤ主義は関係ない」と応じました。「反ユダヤ主義」というレッテル貼りでイスラエル批判を封じる常套手段に、明確な反論をしたのです。そして、9月22日の国際会議で明らかになったパレスチナ国家承認国の増加。

このように、イスラエル批判の国際世論はじわじわと広がり始めています。しかしイスラエルは、お構いなしに強硬路線を突っ走っていました。

国際法違反の批判届かず

前号で、イスラエルの平和活動家の話を紹介しました。イスラエルは民間人は攻撃しないと主張していますが、それによると「テロリストを支援する民間人もテロリスト」という、国際人道法にないカテゴリーを掲げています。それにより、たとえ戦場で戦闘に参加していなくても「事実上の戦闘員」として、ガザのほとんどの住民が合法的な攻撃対象と見なされる可能性があるということです。「ガザの住民はみんなハマスのメンバーだ」という考え方が、この違法な政策を正当化しているということです。ネタニヤフ首相はしきりに「イスラエル軍は世界で最も倫理的な軍隊」と言いますが、兵士が守るべき倫理綱領の倫理基準が低く設定されていたなら、それを守っているという主張の正当性が弱まります。

また、イスラエルは圧倒的に強力な攻撃を加えることで、武器だけでなくインフラ、資金の流れなどに重大な損害を与え、住民を屈服させることを目的としています。社会の支援基盤も破壊すること、つまり民間人や民間施設への甚大な被害を前提としているわけですから、国際法に違反しているはずですが、しかし、そう批判されたところで、誰もその違反に対する罰を強制できないと知っているから、それに米国の支持もありましたから、イスラエルは気にしませんでした。

イスラエル国内の政治的背景もあります。汚職疑惑で訴追されているネタニヤフ首相は、権力の座を下りれば刑務所行きになるかもしれない身です。彼の連立内閣は、ガザ停戦に反対する強硬派の極右政党にキャスティングボードを握られており、現に今年1月の停戦合意の時は、それに反対する極右政党「ユダヤの力」が連立から離れました。強硬派の離脱が続いて連立政権が崩壊するのを防ぐため、ネタ

ニヤフ首相は3月に停戦合意を無視してガザでの大規模作戦を開始しました。内閣の維持は自身の地位保全のためと見られるのは、根拠のないことではありません。

暴力に暴力の連鎖を断つ

パレスチナ国家を承認する国が150カ国を超えたことを1面で伝えた9月24日の朝日新聞文化欄に、20年連載が続いた「ヴィンランド・サガ」という漫画が完結した、という記事がありました。物語の内容はともかく、数えきれない人々の命を奪ってきた主人公に「仕方なかろうが、苦しもうが、戦争を未然に防ぐためであろうが『正しい暴力』というもの存在だけは認めてはいけない」と語らせた、という記述に目を奪われました。作者の幸村誠さんは「…、ガザへの攻撃を続けるイスラエルのネタニヤフ首相に対して僕の中には『こいつらをやっつけたい』という怒りがあり、その感情を『正義だ』と思い込もうとしている。だけど、暴力に対する憎しみは新

たな暴力を生むだけです」と言います。

当NPO「聖地のこどもを支える会」が続けている、イスラエルとパレスチナの若者を日本で交流させる「平和の架け橋」活動の中で、被爆地長崎に学んだものがあります。原爆の惨禍をくぐりながら、恨みや報復の気持ちを克服して平和の希求へと向かった長崎の姿は、暴力と報復の連鎖の中にあるイスラエルとパレスチナの若者たちに強いインパクトを与えました。

報復の気持ちを抑えて和解を求めるなど、容易なことではありませんが、今年の交流活動にイスラエルから参加し、パレスチナ人と意見を戦わせながらも親しくなった若者の一人が、帰国したら家族や周囲の人たちに「パレスチナ人の友だちがいて伝え、偏見をなくしたい」というメッセージを残しました。ささやかではあっても、こうした試みが広がっていくことで、ガザの惨状を「なんとも思わない」というイスラエル人が少しでも減っていくとの希望を持たいものです。

平和を願うオルガンコンサート

エルサレムのパイプオルガニスト、ヤクブ・ガザウィによるチャリティコンサートは2017年から始まり、コロナ禍を除き今年で6年目となります。ご支援金は必要経費を差し引いた上で聖地の子どもたちの支援、またこの2年間は特にガザ支援のために活用されています。

今年は中東情勢の影響でトラブルが起きました。5月の九州3箇所のコンサートは、オルガニスト本人が来日できず、やむを得ずキャンセルとなりました。カトリック熊本教会、カトリック浦上教会、福岡平尾バプテスト教会の皆様、ボランティアの皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

関西では、日本聖公会川口キリスト教会、カトリック神戸中央教会、カトリック玉造教会でコンサートを開催できました。前田枢機卿様をはじめ、各教会の神父様、牧師様、スタッフの皆様の温かいご協力のおかげで大盛況となりました。特に前田枢機卿様にはご臨席と温かい励ましのお言葉を賜り、また、全ての面で惜しみないご奉仕をいただいた松中雅彦様には心より感謝申し上げます。

首都圏では、おかげさまで予定通り開催することができました。日本キリスト教団横浜指路教会と番町教会、カトリック横浜山手教会、日本聖公会聖オルバン教会、立正佼成会の皆様のご理解と寛大なご協力があったからこそ、コンサートを実現することができました。

最後に、猛暑にもかかわらず各会場に足をお運びくださった1600人を超える聴衆の皆様、演奏後にガザの現状についてヤクブのトークにも耳を傾け、寛大なご支援金を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

ボランティアグループ

「イスラエルとパレスチナの平和を願う会」



総括

井上弘子 村上宏一

はじめに

「聖地のこどもを支える会」が2005年から続けてきた、イスラエルとパレスチナの若者を日本に招いて交流を図る「平和の架け橋プロジェクト」は今年、20年目を迎えた。コロナ禍による中断はあったものの、ささやかながら平和の種をまこうと活動を続けてきた。一昨年10月7日のイスラム教原理主義組織ハマスによる奇襲攻撃に端を発したガザ戦争は、活動の継続を危うくしかねない状況をもたらしたが、そんな中で去年、参加者は少なくとも実施にこぎつけた。間もなく2年になろうという戦争状態には終わりが見えず、2025年度のプロジェクトも去年同様、実施を決めたのは年が改まってからだった。

これまでのプロジェクトでは、イスラエル、パレスチナ、日本からの新規参加者を公募して迎え、国境を越えた交流を通じて平和への理解を深める機会を提供してきた。しかし紛争状況が厳しい現地では、イスラエル・パレスチナ双方が互いに不信や憎しみを抱える中、ネットなどSNSを使って「平和の使者を募る」のような情報が流れると、どんな攻撃を受けるかわからないという心配があった。そのため去年に続き今年も、これまでのプロジェクト参加者やその縁故を頼って直接声をかけて募集した。選ばれて来日したのはイスラエル人4人(ユダヤ系3人、アラブ系1人)、パレスチナ人3人。いずれも和平に前向きで、現に平和活動に携わっている若者もいた。日本からの参加者4人と共に2週間の共同生活で、個人的なつながりを作り、共存への意思を高めた。

対話のプロセスと成果を日本国内に広く伝えるため、シンポジウムを開催して多くの人々との共感と理解を得ることも目指した。短い時間ではあっても共に過越し、直に接し、互いに受け入れ合えるのかという不安を乗り越えて語り合った成果を、メッセージに込めて発表した。

プロジェクト準備



8月8日原爆殉難者慰霊祭。毎年8月8日にすべての宗教者(キリスト教・仏教・神道など)が合同で、爆心地にて行う。

実施の決断

今年のプロジェクトも、実施するかどうかの検討から始まった。戦争が続いている中で、和解を語り合う活動に応募しようという若者をどれくらい集められるだろうか、出入国をはじめとする活動が可能なのか、などの懸念があった。しかし、紛争を断ち平和の種をまこうという架け橋プロジェクトをここで絶やしてはならないとして、1月の理事会でようやく「やる方向」を確認、4月になって参加者の募集に着手した。

参加者の募集

現地での参加者募集は前述の通り、過去のプロジェクト参加者本人やその友達、またその友達を誘ってもらう「一本釣り」にした。参加費を負担しきれないという理由で断念する例が相次ぎ、難航したあげく、なんとか7人が来日することになった。日本からの参加者4人のうち、2人は当法人の交流プロジェクトの一つ、スタディ・ツアーの経験者で、その体験が今回の架け橋プロジェクト応募のきっかけとなった。

協賛・後援など

いつものようにヨハネ・パウロ二世財団の協賛、国際協力機構(JICA)の後援を得たほか、長崎では宿泊から協力団体などとの連絡・調整などで、カトリック長崎大司教区から大きなお力添えをいただいた。

プログラム作り

プロジェクト実施の決定が遅れたことで、プログラムの検討が本格化したのも5月以降。戦争・紛争を改めて考える機会にする意味で今回も被爆地・長崎を訪れることにした。宿所の提供やプログラムの作成、

原爆の日の祈念式典参加、被爆者や宗教団体との連絡などで、長崎大司教区の中村満神父様には特にお世話になった。

費用

円安の影響は相変わらずで、特に航空運賃の負担が重かった一方、参加費は上げられず、当法人の持ち出しが大きくなった。支援者のご寄付に支えられたほか、エルサレムの現地スタッフであるヤクープによるチャリティーオルガンコンサートを関西、関東などで開催して寄付を募った。

事前研修

本来なら来日前に集まって最初の触れ合いをしてもらうのが望ましいが、イスラエルとパレスチナの若者が公の場で顔を合わせるなど考えられないため、リモートによる顔合わせとなった。日本組は実際に集まって、紛争をめぐる歴史などを学習した。

プロジェクト実施

田平での活動

8月3日(日)～7日(木) 朝

順調な立ち上がり

イランとの交戦などで空港が閉鎖されることが多かったため、イスラエル・パレスチナからの参加者が無事日本に来られるかどうか心配された。実際に去年は、ハマス最高幹部がイラン滞在中に殺害された事件で報復が懸念されるとして予定の飛行便がキャンセルされ、イスラエル組の2人の日本到着が遅れた。今年は予定通り3日昼までに成田空港に集まって福岡空港へ向かい、日本からの参加者と合流した。

福岡から長崎までは、田平教会が用意してくれたマイクロバスで移動。

合宿生活=まず打ち解ける

宿所にはカトリック田平教会の中村満主任司祭のお世話で、教会の信徒会館が宛てられた。若者たちは男女それぞれ床に布団を敷いたごろ寝の合宿生活が始まった(7日からの宿所は長崎市のお告げのマリア修道会サンタマリアの家修道院)。

共同生活が始まって最初の数日間は、言葉遊びや

野外活動、地元の子どもらとの交流に費やされた。普通の赤の他人同士とは違う、相手側が敵対的な気持ちを持っているかもしれないという間柄の人達がどう接していくか。それには政治的な話題を避け他愛もない言葉を交わしながら、それぞれの個性や人柄を知ることから始めるためだ。

海に舟で乗り出して釣りをし、初めての釣り経験者が次々と釣り上げて称賛を浴びたり、まったく釣れず暑さにたまりかねた人が海に飛び込んだり。あるいは、温泉での裸の付き合いが打ち解け合う場になったり。こうして培われた関係が、後にそれぞれの紛争体験や苦しい思いを語り合う時に、憎しみをぶつけ合うだけで終わってしまわない基盤となった。

地元との交流

子どもと一緒にうちわや扇子に絵を描いたり、折り鶴を作ったりしたほか、習字で「平和」という字を書いたり生け花に挑戦したりした。折り鶴はその後もみんなで作った。

長崎市での活動

8月7日(木) 午後～13日(水) 朝

殉教の果てに

浦上教会の被爆のマリア像が安置されている小聖堂で、聖エジディオ共同体という、対話で平和を追求する団体のニューヨーク代表であるアンドレア・バルトリ氏の講演を聞いた。バルトリ氏は長崎のキリシタンの殉教について語り、「江戸時代からの300年にわたる苦しみ体験は、原爆という惨禍に備えるための歴史だったかのよう」という趣旨のことを語った。このような考え方は、報復の連鎖の渦中にあるイスラエルとパレスチナの人々にはどう受け付けられな



長崎の宿舎「サンタマリアの家」の食堂で、その日の活動の打合せ

いと思われるが、バルトリ氏は「イスラエル、パレスチナの若者たちも、長崎の人々の原爆への対し方には驚くでしょう」と語る。確かに、恨みや報復の気持ちを克服して平和の希求へと向かった長崎の心に、若者たちは感銘を受けていた。

原爆資料館の見学

悲惨な映像や原爆の破壊力・人体への影響などを示す資料に、だれもが息をのむ様子で見入っていた。館内で、見学中のワリード・シーム駐日パレスチナ大使に出会った（写真、右端）。プロジェクトには在日イスラエル大使館とパレスチナ常駐総代表部の協力を得ていたが、2023年10月以来の戦争状態の中で、去年も今年も協力要請はしていない。偶然出会った大使は「イスラエルとパレスチナは同じ舟に乗っている。片方が落ちたらもう一方も落ちる」と述べて、両者は向き合うべきだと言った。



原爆資料館で偶然ワリード・シーム パレスチナ大使にお会いし、イスラエル・パレスチナ・日本の【平和の架け橋】メンバーと知って喜んでいただいた



長崎に落とされた原爆「リトルボーイ」の模型

長崎平和祈念式典

8月9日の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は、平和公園の本会場に入れず原爆資料館内のホールでの参



8月9日の長崎平和祈念式典（この日は雨天で原爆資料館内のシアターで行われた式典に出席した）

列となった。大きな画面に映し出される式典の様子は、正直言って本会場のテントの一角にいるより明確に掌握でき、鈴木史朗長崎市長の平和宣言もしっかり受け止められた。核廃絶を願う被爆者の行動を念頭に「はじめの一步は相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていくことが市民社会の大きな役割です」と語った言葉は、このプロジェクトの趣旨にも通じるものだった。去年、式典にイスラエル大使を招かなかったことでアメリカ大使らがボイコットする事態になったことから、市議会議長による式辞では、核兵器廃絶とは逆行する動きを説明する中で「中東地域における武力紛争」と具体的な国や地域名を避ける政治的配慮が見られた。

深刻な議論

共同生活を始めてから7日目、各自の「紛争」について語るミーティングを開いた。個人的な旅の同行者との行き違いといった笑いを誘うようなエピソードもあったが、当然イスラエル・パレスチナ間の紛争に伴う怒りや戸惑いなども語られ、そこから深刻な議論になった。発端は、ガザ駐屯のイスラエル兵がレッドラインを超えて近づく不審なパレスチナ人は狙撃していいというイスラエル軍の基準をめぐる論争。例えば赤ん坊を抱いているように見える女性が近づいてきたらどうするか、という場合。イスラエル側からは、そのような自爆テロの例があるから狙撃命令を一概に非難できないのでは、との意見が。イスラエル側参加者はガザ侵攻に批判的なだけに、弁明には戸惑いも



参加者一同で、紛争体験の分かち合い

あったが、イスラエル軍の非人道性を責め立てるパレスチナ側の言葉は容赦ないものだった。

間に立つ日本側参加者たちには、割って入りようのない熱を帯びた議論だったが、翌日の長崎市民との対話集会では、前夜の激論はなかったかのような前向きの中間メッセージを披露した。

平和コンサート・対話集会

10日午前、浦上天主堂でヤクープによるパイプオルガンコンサートを開催した後、長崎市民と対話する機会を持った。そこで発表されたメッセージは、三つに分かれたグループがそれぞれにまとめたもので、例えば次のようなものだった。

「私たちは、日本の人々が原子爆弾の悲しみと恐ろしさに、憎しみではなく、平和と優しさで応えてきたということを知りました。このことは、たとえ痛みや分断の中でも、平和への小さな一歩は可能だという希望を与えてくれます。

このプロジェクトは私たちに、正直に気持ちを語り、お互いを尊重しながら聞き合う機会を与えてくれました。一緒に活動し時間を共有する中で、私たちにはいろいろな違いがあるけれど、それでも同じ人間としてつながれるということを発見しました。争いは、まだ残っています。私たちが家に帰っても、それが消えることはありません。けれど、ここで築いたものは、たとえさまざまな問題が残っていても、お互いを尊重し、思いやることを選ぶことはできるという証になるでしょう。イスラエルとパレスチナに帰国すれば、分断はまだそこにあります。けれど私たちは、衝突がある中でも『人と人が繋がることは可能だ』という証を持って帰ります」

たった一晩で、これだけのものができた。それは、意見の違いがわかって、出会いから数日間の交流の中で互いの人となりを理解し、人間として認め合うことができたからこそ、違いを乗り越えて考えをまとめようという気持ちになったからであろう。

核軍縮レクチャー

長崎大学の吉田文彦教授・核兵器廃絶研究セン



浦上天主堂で行われた「長崎市民との対話集会」。参加者たちは田平、長崎での体験について感想を語る。その後、質疑応答

ター長による、核兵器保有国の保有状況などについての解説。発射されたら標的にされた国に到達する直前まで察知されにくい弾道ミサイルの開発が進み、核兵器使用の可能性を抑える努力の必要性がますます重要であることが語られた。

如己堂と永井隆博士記念館見学

プロジェクト参加者たちは永井隆博士記念館と如己堂も見学した。彼らは、被爆しながらも白血病と闘い、如己堂で死の床にあってなお愛と平和、そして命の尊さを訴え続けた永井博士の生き様に深い感動を覚えていた。博士の献身と優しさに触れ、それぞれの立場を超えて平和の意義について改めて考えるきっかけとなった（「如己堂」とは「己の如く人を愛せよ」という聖書のことばから来ている）。

恵の丘・原爆ホーム訪問と交流

長崎での最後の、そして最も感動的なアクティビティは、「恵の丘・原爆ホーム」訪問であった。前半は、被爆者たちのためのヤクープによるピアノコンサート。ホームのホールは、入所している被爆者の方々、介護スタッフの方々、そして当方のプロジェクト参加者・スタッフ15人を含め200人近い聴衆で埋まった。開会にあたって、プロジェクト参加者が田平滞在以来折り続けた500羽近くの鶴が入所者に捧げられた。

コンサートの最後のアンコールでは「永井隆博士」ゆかりの「長崎の鐘」を全員で歌うことになった。被爆者の方たちはみんな、すべての歌詞を覚えていらっしやって大きな声で歌ってくださった。中には目を拭いながら歌っておられる方も。ヤクープはそれを聴いて感激で涙が溢れ、伴奏の楽譜も見えずにピアノを弾いていたそう。そしてまた全員で、アシジの聖フランシスコの祈り「私を平和の道具にして下さい」を日本語で歌った。

この訪問の後半は、昨年もお会いした91歳の被爆者、築地重信氏の体験を伺った。14歳で被爆し、今も



8月12日原爆ホーム訪問：被爆者の築地重信さん（中央）と

なお脳裏に焼き付いているその体験の鮮烈な映像を60歳になってから初めて絵画として表現し、原爆の悲惨さを証言してこられた方である。ことばに尽くせぬ被爆直後の悲惨さ、一瞬にして命を失った母への想い、後に白血病で妻を失った悲しみなどをとつとつと話して下さった。90歳を過ぎててもなお、原爆の恐ろしさを証言し続け、核のない平和な世界の構築を訴える築地さんのことばは、戦争と紛争のまっただ中であって、平和を望みながらその道を見い出そうともがいている若者たちの心に深く響いた。

感謝

田平を含め10日間の長崎滞在では、田平教会とお告げのマリア修道会のボランティアやシスター方に食事をはじめ合宿生活を支えていただいた。また中濱護、小淵光弘のお二人には、去年に続き滞在期間を通じて各目的地への移動でお世話になりっぱなしだった。皆様に深い感謝の意をお伝えしたい。

東京での活動

8月13日（水）午前～17日（日）午前

話し合い

長崎空港を発って次の宿泊地、JICA 東京国際センターに到着したのは13日の夕刻。翌日から真剣な話し合いが始まった。長崎での平和と戦争に関する学びをもとに、それぞれの紛争体験の苦しみを分かち合い、さらに絆を深めていった。時には意見がぶつかり、熱くなることもあった。そんな時は、議論を中断して二人一組に分かれ、お互いに目と目を見つめ合って話し合う場を持った。すると、冷静さを取り戻して相手の発言に耳を傾ける姿勢が戻っ

た。国では、イスラエル人とパレスチナ人が接する機会さえほとんどない。分離壁に隔てられ、「向こう側」を見ることのない世界にいる彼らが、正面から向き合うことの大切さを知る場となった。

絆ゲーム

最後のアクティビティとして、互いに友だちになったことの感謝と喜びを表す「絆（きずな）ゲーム」を行った。互いの間に結ばれた絆を象徴するために、まず参加者は円陣を作って座り、この2週間の合宿生活をとおして感謝したい、評価したいなどと思った相手に、その理由を言いながら、荷造り用のビニール紐のプロットを投げるというもの。紐を投げられた人は同じように別のの人に投げるので、最後にはクモの巣のようになり、互いの心の絆を形で表すものになる（次ページの写真参照）。

シンポジウム

16日に東京・四ツ谷の聖パウロ女子修道会若葉修道院で、プロジェクトを締めくくるシンポジウムを開催。メディア関係者を交えた聴衆を前に、共同で作成した「平和のメッセージ」と各自の「プロジェクトのまとめ」を発表した。

個々のメッセージ

■紛争の中で感じる痛みを和らげてくれると期待して参加したのは、間違っていなかった。認識の異なりに気づくこともあったが、共に過ごした時間が、分断と憎しみが支配する中でも友情と互いを知ることの大切さを教えてくれた（イスラエル人女性）。

■私たちは同じ人間。共に生きるしかない。落ち着いた方法で話し合いたいという思いを果たすことができた（パレスチナ人男性）。

■相手側のことをある程度理解していると思っていたが、激しく議論することもあった。でも、その後はいっしょに遊びに行ったりして、家族とさえ思える友だちもできた。いつか、イスラエル人とパレスチナ人がどこでも共に歩ける姿を見たい（パレスチナ人女性）。

■重要な問題で共通の基盤を築くことはできなかったものの、異なる意見を持つ相手でも共存できることを知ったのは大きい（イスラエル人男性）。

■参加する前は遠慮の壁と沈黙を予想していたが、顔も知らなかった人たちと友だちになった。そこから生まれる感情は貴重だ（アラブ系イスラエル人）。
■パレスチナ人と接したことのない周囲の人たちに、パレスチナ人の友だちがいるし彼らも同じ人間だということを伝え、偏見を取り払いたい（イスラエル人男性）。

日本の参加者からは次のような発言が。

■白熱した議論の際に自分たちは仲介役を果たせないのが苦しかったけど、聞いているという存在が議論を助けたかもしれないと思った。
■中立に逃げないようにしたいと思った。対話を促す仕事をしたい。
■私たちが参加する意味は何か。世界中で紛争が続く中で、平和な日本を伝える意味は何かと考えた。
■相手を受け入れる、相手を知ることが第一。将来、教職に就いたら、子どもたちに同じような体験をさせたい。

聴衆からの質問と回答

——プロジェクトに参加するにあたっての周囲の反応は？

■イスラエル人との接触なんて許されないという雰囲気がある中で、家族には、共存ということについて少し考えを変えさせられるかなと思う。
■家族は入植地において、平和に関して違う考えを持っており、安全を心配された。ここに集まっている人たちは国にとっては「いい人」ではないが、変革は自分の使命だと思う。

——双方の教育に欠けているのは何か？

■「向こう側の人間」を知らないし、受け入れるという寛容さがない。自分なら、人間である者として対することを教えたい（イスラエル側）。
■怒りしかない（パレスチナ側）。
——日本でやることの意味は？
■戦争、原爆などの惨禍を克服したこと、平和を選んだことから学べる。
■緊張の空間から抜け出せる。



心のつながりを目に見えるかたちで確かめ合う「絆ゲーム」

終わりに

本プロジェクトの開始から20年。戦争が続く中、去年に次いで敢えて実施した今年の「平和の架け橋プロジェクト」も、大勢の方々の惜しみないご協力のおかげで、何とか無事に終えることが出来た。

プロジェクト参加者の募集を始めようとするころ、支援者の方から人選について次のような意見があった。

「イスラエル、パレスチナの和解・共存に賛成か前向きの人たちでなく、それに反対する人を選ぶべきだ。彼らが接し、話し合えるようになってこそプロジェクトの意義がある」

確かにそうできることが望ましい。しかし、非難や中傷などの介入を避けるために公開での募集をやめたほどで、交流活動に理解のない人の募集は難しいうえ、参加してもらったとしても理解し合えるようになるには時間がかかり、負担が重過ぎる。結果として、双方とも交流に前向きな人たちが選ばれた。

従って、敵対する空気や言い合いで平和を目指すメッセージをまとめられない、との心配はなかった。それでも、紛争や戦争に絡む議論になると、相手側に対する厳しい意見も出てきて納得し合えない問題があることも明らかになった。それが決定的な対立に終わらなかったのは、個人同士では同じ人間としての親しい結びつきができていたからであろう。「異なる意見を持つ相手でも共存できることを知った」といった感想が得られたのは、貴重な収穫と言える。

しかし、実りある交流ができたことは、このプロジェクトのゴールではない。それぞれの故郷に帰ったら、そこは「相手」に対する不信と憎しみが満ちている。それを和らげ、なくしていくという困難な仕事に取り組むことが、プロジェクトの成果として期待される。まとめの言葉として記された「周囲の人たちに、パレスチナ人の友だちがいるし彼らも同じ人間だということを伝えたい」「イスラエル人との接触なんて許されないという雰囲気がある中で、家族には、共存ということについて考えを変えさせられるかな」などの気持ちを大切にしてほしい。

率直な対話で困難克服
ヤクーブ・ガザウィ
(プロジェクトマネージャー)



今年は「平和の架け橋」プロジェクトが始まってから20周年の節目となりました。私は20年前の最初の参加者の一人として、この記念すべき年にプロジェクトマネージャーとして加わり、企画・準備・運営の全てにかかわれたのは、とても感慨深いものでした。

2025年のプログラムは非常に大きな意味を持っていました。長崎の物語——壊滅的な被害から立ち上がったこの街の歴史——は、特に現在も続くガザの悲劇を思うとき、未来への強い希望とインスピレーションを与えてくれました。最も暗い時代であっても、再建は可能であり、破壊の跡地にも平和が芽生えることを長崎は教えてくれます。この回復力のメッセージは、参加者全員の心に深く響きました。

プログラム中の対話は決して簡単なものではありませんでした。参加者は異なる背景を持ち、ときには互いの意見を聞き入れるのが難しい場面もありました。しかし、だれもが**敬意と開かれた心**で耳を傾け合いました。率直な対話と忍耐を重ねることで、**理解と尊重という共通基盤**にたどり着くことができました。それは全員が同意したという意味ではありませんが、互いの人間性と尊厳を大切にすることを学びました。

プロジェクトで最も意義深かったのは、**田平**で共に過ごした時間でした。参加者が日常生活や食事、さまざまな体験を共有することで、お互いを対立する相手側の代表としてではなく、**友人や同じ人間**として見ることができました。この共同生活は、参加者にとって大きな変化をもたらしました。

私は常々「日本の素晴らしい点の一つは、イスラエル人とパレスチナ人が実は多くの共通点

を持っていることに気付かせてくれることだ」と言っています。母国では対立の影に隠れて見えにくいその共通点が、日本のような平和で文化が異なる環境では自然と現れ、心の壁を取り払い、心を開くきっかけになります。

プロジェクトマネージャーとして、今年のプログラムの企画は決して容易ではなかったと認めざるを得ません。現地の状況を考えると、なおさらです。しかし、対話やワークショップからゲームなどで緊張を解くアイスブレイクまで、全ての活動は共感やつながり、相互理解を促進するよう慎重に設計しました。**東京での最終シンポジウム**で見られた成果は、すべての努力が報われたことを証明してくれました。議論は深く、誠実で、希望に満ちていました。

このプロジェクトは規模こそ大きくありませんが、その**影響力は強く、長く続くもの**です。まさに、一つひとつの対話、一つひとつの友情、一つひとつの共有体験が、人々を変えていっています。プロジェクトの実現に寄与していただいた**NPO「聖地の子どもを支える会」**や**全ての支援者の皆さま**に、心から感謝申し上げます。皆さまの寛大なご支援、献身的な取り組み、そして平和への信念がなければ、この意義深い節目を迎えることはできませんでした。今後も日本での「平和の架け橋」プロジェクトが成長し、さらに多くの人々にインスピレーションを与え続けることを心より願っています。

この平和の架け橋を守り続けてくださり、本当にありがとうございます。



2005年、2007年、2024年のプロジェクトでお世話になった高見名誉大司教様、中村神父様とともに

平和のメッセージ

全員で作ったメッセージ

私たちは異なる場所から集まり、痛みや歴史、そして希望を抱えてきました。生活を共にし、耳を傾け合い、分かち合う中で、政治や対立を超えて、私たちは何よりもまず「人間」であることに気づきました。顔を合わせて出会うことで、平和は紙の上の合意から始まるのではなく、思いやりや対話、そして耳を傾ける勇気から始まるのだと改めて感じました。

私たちは、互いの苦しみを認め合うこと、次の世代に対し分断ではなく人間性を見るよう教えること、そして人々が出会い、分かち合い、共に希望を持てる場を作ることが、前進への道だと信じます。正義や尊厳、平等は不可欠ですが、同時に、親切や理解、友情といった小さな日々の行いもまた、希望をつなぐものとして大切なのです。

平和は一気に訪れるものではないかもしれませんが。しかし、すべての対話、すべてのつながり、そして私たちが伝えるすべての記憶が、お互いの敬意や思いやり、自由のもとで共に生きる未来をつくる一歩となるのです。

一人一人のメッセージ

痛みや夢を聞き合えた

ノア・ライズナー

(イスラエル・26歳)

プロジェクトに参加する前、私はとても不安でした。ガザでの破壊、日の光を見ることのできない人質たち、母親や子どもたちの痛み。両方の人々が経験している計り知れない苦しみについて長い間考え続ける中で、私は、このプロジェクトが自分の抱える痛みを、より意味のある場へと導いてくれるのではないかと感じていました。

そして、その考えは正しかったのだと気づきました。日本に到着した瞬間から、私たちの国の現実がさらに厳しく切迫したものとなり、抗議活動に参加



できていないことへの罪悪感が湧き上がりました。しかし、それでも、ここで私たちが行ったことはより強いものだと思います。

抵抗は、人々が共にあるとき、より強くなります。私は、相手側の痛みや緊張、そして夢を聞く特権を得ました。私自身の声を共有し、聞いてもらい、受け入れてもらうという特権を得ました。

ここで私は、両方の人々の根本的な認識の違いを理解しました。しかし、それ以上に、人間としての私たち、すなわち平和を求め、静けさを求め、完全な権利の平等を求める存在を感じました。私たちが築いた友情は強く、微笑みや笑い声、共に過ごした時間が、私たちを隔てるものを超えてみせることを実感しました。

これまでで最も困難な日々において、分断と憎しみが周囲を覆っている中でこのプロジェクトに参加したことがどれほど勇敢なことかを、私たち全員が感じています。

私たちはここで語り合い、共有し、笑い、そして痛みを分かち合ってきました。私は、この道、すなわち人間性と友情の道を歩む以外に選択肢はないと感じています。若い世代が、両民族の間に親しさが生まれ、相手に顔があることを認識し、人々が恐怖だけに養われるのではない世界で育っていくことを願っています。

帰国したら、私はここで共に経験したことを身近な人たちと分かち合いたいと思います。たとえ11人の小さなグループでも、より大きな影響を与えられると信じています。

私は、イスラエルが一刻も早くガザから撤退すること、人質の帰還、ガザの再建、私たちの魂の癒し、そしてこの地に暮らすすべての人々に完全で平等な権利が与えられることを願っています。そしてこの地が血に染まることを終わらせたいのです。私たちは皆、平和と安らぎを望んでいます。そのために、私たち自身と未来の世代のために闘わなければなりません。

「人間」として知り合う

アミット・アヴニメレク

(イスラエル・23歳)

私は、両民族を平和に近づけるための現実的な一歩は、教育制度の中に双方の人権や過ちを認め、人々への平和と配慮を促すような、より両面的な見方を

取り入れることだと信じています。

このプロジェクトに参加する前の私の期待は、私と同じ地域に住みながらも全く異なる人生を送っている人々に出会い、彼らが私たちの生きている状況をどのように見ているのかを聞くことでした。その期待は実現しただけでなく、イスラエル人、パレスチナ人、日本人の仲間と深く個人的なつながりを持ち、「人間」として知り合うことができました。

このプロジェクトでの経験は、目を開かれるものでした。日本という私にとって全く新しい文化と人々に出会い、さらに自分が生きている現実を新たな視点から捉えることができました。

この経験は、いつの日か私たち皆が壁を取り払い、自分たちが同じ人間であることに気づけるのではないかという希望を与えてくれました。私たちは皆、良い暮らしと平和な生活を望んでいます。互いを自分と同じ「人間」として見るのができたとき、長く続く平和を目指せるのだと私は信じています。

違いそのまま対話共有

エリヤシヴ・ニューマン (イスラエル・27歳)

プロジェクトの参加前は、日本に行き、パレスチナ人や日本人と出会い話することが、自分にとって良い経験になるだろうと思っていました。私の目標は、対話し、つながりを持ち、私にとって非常に重要なテーマについて共通の基盤を見つけることでした。プロジェクトにおいて、つながりや対話を持つことはできましたが、いくつかの非常に重要なテーマについては、共通の基盤を築くことはできませんでした。

その代わりに、私の期待は変わり、人々が自分にとって非常に重要なテーマについて強く意見が対立していても、同じ空間を共有し、さらには一緒に楽しむことさえできるということを、直接目の当たりにしました。それによって私は、平和をより現実的



に見るようになりました。つまり、相手が紡ぎ、語るのと同じ物語に同意するよりも、平和への共通の関心を分かち合うことが重要なのです。

私はすべての参加者と一緒に、本当に楽しい時間を過ごしました。皆の中に、たくさんの美しさを見ました。お互いの文化に出会えたことも、私にとって本当に重要でした。だからといって、プロジェクトでの時間がすべて楽しい時間だったわけではありません。特に議論の中では困難に直面しました。いくつかの参加者の見解は、私にとって非常に重要なテーマについて、私のものとは大きく異なっていました。

しかし私は、それまでに共有してきたことや話し合い、経験によって、何とかこれを乗り越えることができたと思います。これは簡単なことではありませんでした。ですが、目の前にいる相手を知ること、その人の心や、お互いに耳を傾け合おうとする開かれた姿勢を知ることができたからこそ、可能だったと思います。

私の将来の計画は、共存に向けた取り組みを続け、願わくはより良い未来をつくることです。また、参加者の皆と再会したいです。時には、人は心に印を残していきます。そしてその印は、これから何年も私の中に残り続けるでしょう。

開かれた心が対話生む

ファディ・ビシャラ (イスラエル在住 アラブ人・21歳)

もし私が平和に近づくための一歩を求めることができるなら、それは共に立ち止まるひとときです。まだ平和ではありませんが、人々が再び人間であると感じられるだけの長さの呼吸です。

その静けさの中で、家族は再び一つになります。殺戮は止まり、パレスチナ人の被拘束者たちは愛する人々のもとへ戻り、イスラエル人の人質たちも家に歩いて帰ります。捕らえられた人々を互いの国に帰すという行為こそが、命そのものが大切にされているという最も明確な合図になるのです。

その静けさの中では、人間にとって必要不可欠な



ものが政治よりも優先されます。食料、薬、きれいな水、電気が自由に行き交い、壁や門に阻まれることはありません。子どもがコップ一杯のミルクを求めて検問所で待たされることなどあってはなりません。そして土地そのものも休息します。入植地拡大は止まり、ブルドーザーは静まり、クレーンも眠りにつき、丘に新たな傷跡は刻まれません。同時に、軍も日常生活から一步退きます。学校の門から銃が退き、ドローンは空を鳥たちに返します。安全は保たれ、恐怖が街角を支配することはなくなります。

理屈は単純で、思いは深いのです。民間人の死は減り、家族は再会し、命が再び息を吹き返します。呼吸から対話が生まれ、対話から最初のか細い前進の道が始まるのです。

私が交流のため日本に来たとき、壁や沈黙を予想していました。しかし、実際に見つけたのは開かれた耳と開かれた心でした。私たちは悲しみも、喜びも、小さな夢さえも分かち合いました。私たちは瞬く間に、見知らぬ者から友人へと変わったのです。このプロジェクトは私に稀有なことを教えてくれました。共に生きるということは解けないパズルではなく、最も人間的な営みだということです。私の願いは、ここで築いた橋が日常生活にも続いていくことです。なぜなら平和は国旗や署名から始まるのではなく、一つの親切、一つの勇気、一つの理解の行為から始まるからです。

相手の苦しみも知れた

ジハード・アブスネイネ
(パレスチナ・29 歳)

私たちはパレスチナ人とイスラエル人として違いはあっても、共に集まりました。国全体、特にパレスチナ人の苦しみを止めることを願って。また、抗議に出かけ、互いの権利のために立ち上がり、交流し合い、共存するために。

このプロジェクトの前、私はもっと多くのイスラエル人に会って、彼らの視点を知り、落ち着いた方法で話をしたいと思っていました。なぜなら、たった一言で人の心を変えることができると知っているからです。多くの人々は相手の苦しみを知りません。



だれもが違う形で苦しんでいます。相手の苦しみを知ること、私にはそれができたと感じています。

人として同じ空間で生活することには、何か特別なものがあります。すべての違いを忘れ、ただ日々の家事に集中すること。一緒にハイキングに出かけることを楽しみにすること。一日の終わりには、私たちはそんなに違わないということに気が付きます。それが、このプロジェクトが私に強く示してくれたことでした。

私は未来において、それがより大きな規模で、故郷で起こることを願っています。お互いが、自分たちは敵同士ではないと気づき、共に生きる方が良い、他に道はないのだと気づくことを。すべての人には居場所があるのです。

考え違えど互いに尊重

ティア・アラミ
(パレスチナ・24 歳)

日本に来る前、私はある意味で一方的で不完全な視点を持っていました。自分では気づいていませんでしたが、誰のせいでもありません。なぜなら私たちは普段、相手側の視点に触れることがあまりないからです。

しかし、このプロジェクトに参加し、異なる考えを持つ新しい人々に出会ったことで、多くを学び、物事には常に二つの側面があるのだと分かりました。必ずしも語られた多くのことに同意するわけではありませんが、このプロジェクトのおかげで状況をよりよく理解でき、自分自身の偏った立場からの理解に基づいた視点の変化を得ることができました。そして以前のように閉鎖的ではなくなりました。

このプロジェクトが私に教えてくれたのは、人々の違いを受け入れること、そしてよりよく耳を傾けることです。誰かを受け入れるとは、その人と全く同じ考えを持つということではなく、主にお互いを尊重することです。

最初は友達を作るつもりはありませんでした。私はある目的のためにここに来たのです。自分たちの声を伝えるという目的のために。しかし、プロジェクトが進む中で、私たちは違いがあっても非常に似ていることに気づきました。そして今では確信をもっ



と言えます。このプロジェクトのおかげで、私は何年も知っている人たちよりも、自分の心に近い友人をつくることができました。

議論は簡単ではありませんでした。多くの熱い議論、悲しみ、怒り、そして意見の相違がありました。しかし、数日をかけて、少しずつ、お互いの声を聞き、全員が同じ考えを持つわけではないことを受け入れることを学びました。それが私の心をより開かせ、聞くことの大切さを学ばせてくれました。

それを踏まえて、私は思います。私たち若者には伝えるべきメッセージと語るべき物語があるのだと。多くの枝を持つ木も、かつては一本の種から始まりました。簡単なことではなく、時間がかかります。ですが、それは不可能を意味しません。木と同じように、少しずつ、ゆっくりと、しかし確実に、平和のメッセージを植えていかなければならないのです。たとえ批判を受けても。

このプロジェクトに参加してから、私たちは前に進み続け、平和のメッセージを伝え続けることが重要だと学びました。私は人々を集め、その精神を保ち続ける集まりに参加したいと思います。そして、故郷で会合を開いたり、新しい人々や新しい世代を私たちが築いている社会に迎え入れるオープンデーを設けたりすることを手伝いたいです。平和の担い手となることは、今では必要不可欠であり、私の人格の一部になりました。それはすべての人にとってより良い未来への一歩です。

私は「平和の伝達者」になりたいと願っています。たとえ今のような時代には、それが不可能に思えることがあっても。そして、このプロジェクトで植えられた種を信じています。たとえ今が行き止まりに見えるときであっても。

相互理解へ道開く対話

ラナ・ランティシ
(パレスチナ・31歳)

「平和とは、対立がないことではなく、正義が存在することだ」マーティン・ルーサー・キング Jr. の言葉です。

日本ではパレスチナ人の参加者として、私は自由な社会に生きるとはどういうことかを経験



しました。それは、誰もが偏見なく平等な権利を与えられた社会です。その経験は私に思い出させました。平和への現実的な一歩は、正義から始まるのだと——パレスチナの人々に対する正義から。これは国際社会への呼びかけです。「パレスチナ人の命も大切だ」と。

日本やイスラエルからの参加者とともに、私たちは2週間を共に過ごし、学び、そして私たちが共有する土地、イスラエルとパレスチナの現状について振り返りました。私たちは互いの声に耳を傾け、お互いの痛みを認め合い、そして共に必要としている人間性、尊厳、権利に対する必要性を理解しました。

私たちには止められなかった最近の緊張の激化を受けて、私たちはポジティブなもので応えることを選びました。それは、対話です。会話がどう展開するのか、グループの中でどのような力学が生まれるのか、私たちは知りませんでした。けれども、私たちは心を開くことを選びました。それは小さいけれども影響のある行為でした。ただ耳を傾けるだけでなく、自分の声を届けることを、敬意をもって選んだのです。小さくても途切れなく続く水滴のように、相互理解へのこの一歩は、時間とともに大きな力を持つことができます。

私たち一人ひとりが、このプロジェクトに「はい」と言うことで勇気を示しました。そうです。私たちは勇敢です。希望を抱いています。それが見えにくいときでさえ。私たちの語る物語ゆえに孤立したり、判断されたりすると感じるときでさえ。

私たちは橋を架けるために来ました。友情を築き、より良い未来を信じるために。私たちはこのグループを力づけ続けることができます。緊張やつらい感情に向き合いながらも、議論に開かれ、また映画や本といった教育的な材料にも触れていくことができます。

私にとって、長崎の鐘の音は、その希望を手放さずに持ち続け、そして正義を通じて平和に向かって歩み続けることを思い起こさせるものです。

関心を持ち続けること

江口真由(日本・24歳)

参加前には、イスラエル・パレスチナという枠を意識せず、参加者一人ひとりの意見に耳を傾けること、そして自分が第三者である日本人として両者をつなぐ役割を果たすことを目標としました。プロジェクトを終えた今、前者については達成できたと感じていますが、後者についてはまだ自信が持てません。しかし、異なる文化や背景を持つ人々と過ごし、コミュニケーションを取る経験は、自分にとって大きな成長となりました。

もちろん、頭では理解していたものの、実際に行動に移すのは初めてだったため、プロジェクト当初はもどかしさや不安を抱えていました。しかしその中で、一对一の人間として他の参加者と関わることができたことは、このプロジェクトで得られた大きな成果であると確信しています。

その結果、非常に親しい関係を築くこともできました。私は英語が得意ではなく、また彼らが直面している問題について自分の視点を伝えることをためらうことも多かったです。しかし、それでも彼らの話に真剣に耳を傾け、知り、理解することを心掛けました。そのおかげで、シェアリングの場に限らず、個人の経験を互いに話し合えるくらい心を開くことができました。

一方で、シェアリングやディスカッションにおける自分の立場には悩む場面もありました。聖地に関する課題は、現地での経験や自身の研究と重なる部分があり、参加前は他の参加者よりも知識があると思っていました。しかし、実際には自分の知らない現実が多く、苦しんでいる声をたくさん聞いたことで、自分の無知さを痛感するとともに、知った現実に対して何もできていない自分に悔しさともどかしさを覚えました。

こうした経験を通して、聖地の問題に関心を持ち続け、このNPO活動に関わり続けることが、平和のために今の自分にできる最も現実的な行動だと考えるようになりました。そして来春から社会人として働く中で、これまで受け取るばかりだった平和の種を育て、次の世代に手渡せるように行動してい



たいです。

一刻も早い停戦と平和を祈っています。

互いに耳を傾けること

兼城夏穂(日本・24歳)

このプログラムが体現しているように、平和への第一歩は、お互いを知り、そして耳を傾け合うことだと思います。

それぞれが抱えてきた歴史や悲しみを無視しては、平和も実現できません。だからこそ、相手の話を聞いていくなかで、人間に共通する痛みを感じ取り、愛を持って相手を思いやれるのだと思います。

長崎県の永井隆記念館に書かれていた言葉の中で、特に心に残ったものがあります。

「お互いに許し合おう、お互いに不完全な人間なのだから。お互いに愛し合おう、お互いにさみしい人間なのだから。」

その言葉のとおり、私たちはそれぞれ痛みや悲しみを抱えている人間だからこそ、それを補いあえるような関係を、国籍に関係なく築いていくことが大切だと思います。

このプログラムの対話の中で、それぞれのメンバーの話を聞き、私はどちら側の痛みも感じました。自分は体験していないことでも、自分のことのように辛くなる瞬間もありました。

それでも、共同生活や話し合いを通して、私たちは必ず「それぞれの現実が違う」ということを認識し、お互いに耳を傾け合うことができたと思います。相手の考えに合意できなくても、その事実を受け入れ、お互いがそれぞれ違う背景を抱えた一人の人間として存在していることを認識できたと思います。ニュースを見ているだけではわからない、国や政府といった大きなものの背後に、一人ひとりの異なる背景や考えがあることを学ぶことができました。

もちろん、これで終わりではありません。現実には圧倒的な力の構造の差があります。そして、達成されなければならない正義があります。

私たちはここですぐに答えを出したりここで何かを変えんことは難しいかもしれませんが。

それでも、思いは波及していくと信じています。



このプロジェクトを通して生まれた小さな波が、日々の小さな行動を変え、その積み重ねがもっと多くの人の行動に影響を与えていくと信じています。

先入観を持たずに物事を見ることが、相手の状況を完全に理解することは簡単ではありません。それでも、人々に共通する痛み、そして愛をもって、お互いを理解し合える未来を築けることを願っています。

「中立」に逃げないこと

朴珠嬉 (日本・22 歳)

このプロジェクト参加者として、また将来メディアで働く人間として、私は市井の人々の対話を促す番組を作りたいと強く思いました。取材する出来事に、当事者として関わることはできません。けれど、取材相手一人ひとりの声に、同じ人間として耳を傾けることはできます。たとえ同意できなくても、なぜそのように考え、その結論に至ったのかを知りたいと思います。

ただし、第三者だからといって「中立」という言葉に安易に逃げ込むべきではないと思いました。誰かの声を預かることは、その人の人生の一部分を分けてもらっているのだと感じます。それを正確に届けること、弱い立場の声がかき消されないように光を当てること。それが、私にできる「中立に逃げない姿勢」だと考えています。

まずは、さまざまな背景を持つ人たちと友達になりたいという期待を抱いていました。そして、日本にただではなかなか聞くことのできないパレスチナとイスラエルの声に耳を傾けたいと思いました。また、紛争が今この瞬間で起こっている中で、激しい議論や意見の衝突に直面するだろうとも予想していました。

実際の状況や友人たちの感情は、私が想像していた以上にずっと複雑でした。積み重なった悲しみや怒りが絡み合い、混ざり合い、解きほぐすことが不可能に思えるほどでした。それでも長崎で私は、希望を抱きました。人は、同じ人間によって家や家族、友人、日常のすべてを奪われた後でも、なお揺るがぬ平和への願いを持ち続けられるのだと。それは苦しみを忘れたからではなく、むしろその苦しみを経

験したからこそ生まれる願いなのだと感じました。

私は、社会がそのような痛みを決して忘れず、それを復讐や新たな暴力ではなく、愛や人間性で人々を結びつける力へと変えていける未来を願っています。苦しみを憎しみではなく思いやりとともに記憶することこそが、持続的な平和の土台になると信じています。

痛みを分かち合うこと

三島陽 (日本・22 歳)

このプロジェクトに参加する前は、日々の会話や共通点を見つけることで生まれる一体感こそが、このプロジェクトの目的である「平和の架け橋」を築き、共存していくためのゴールだと考えていました。しかし、最も大切なのは、痛みを共有できた経験でした。ミーティングの中で、私たちが抱えている心の痛みや悲しみが表面化することもありました。しかし、他のメンバーは静かにその声に耳を傾け、痛みを共有しようとしてくれました。

こうした経験は、真に他者を知り、受け入れるために不可欠だと私は信じています。他者を知り、受け入れることは平和を築く鍵なのです。だからこそ、もっと多くの人がこのプロジェクトのような経験をするべきだと考えています。また、たとえその対立に直接関与していない国の人間だとしても、このような経験は世界の平和を築く上で不可欠だと思います。だからこそ、より多くの日本の人々にもぜひこのような経験をしてほしいと思っています。

私は将来教師になることを目指しています。また、教員として将来の生徒たちにもこうした経験を積ませることも大きな目標の一つです。このプロジェクトから得た最も現実的な学びは、たとえ大きな対立の中にあつたとしても、痛みを分かち合う経験を通して目の前にいる人も自分と同じ人間であるということを確認し、受け入れることができるようになるということです。平和を実現する最も現実的な方法は、この理解を持つ人を増やすことだと信じています。



共に学べたことに感謝

田川奈美

(大村市国際交流プラザ
職員)

2025年8月、被爆から80年を迎える故郷長崎で、平和の架け橋プロジェクトの一部に参加する機会を得た。途中からの部分参加という限りある中ではあったが、個人的に体験したこと、考えたことを振り返ってみたい。

最初に思い出すのは、参加者達との初対面の時のこと。彼らは既に数日間を共に過ごしていたからであろう、笑顔で次々と挨拶をしてくれ、グループとしての雰囲気がとてもオープンで和気あいあいとしていたことが印象に残っている。紛争が何かしらの深刻さや対立を彼らに投影していると、無自覚の内に予想していたのかもしれない。「あー、そうだった」と思い出した。アメリカ留学中に実施した対話による問題解決のインターンシップでイスラエル・パレスチナに滞在した際、イスラエルとパレスチナ双方でホストファミリーや友人達と穏やかで楽しい時間を過ごしたものだ。争いの映像ばかりが流れるニュースを見ていると忘れそうになるが、争いの中でも人々の喜怒哀楽に満ちた日常生活は確かに続いているのだ。

長崎市内でのプログラムは、被爆80周年祈念式典を中心に様々な式典への参加や施設見学、被爆者との交流など、盛りだくさんの内容であった。原爆の資料を見ながら今のガザを想起し、一つ一つと真剣に向き合い、涙を溜めて高齢の被爆者と接していた彼ら。私自身学び始めたばかりの長崎の歴史が、彼らと共に学べたことで、過去のものとしてではなく、今の自分にダイレクトに問いかけてくる生々しさをもって感じられたことに感謝している。

最も印象に残っているのは、彼らの話し合いの様子である。ある時、パレスチナ

とイスラエルの参加者がヒートアップして話し合いが中断された。お互い、相手を傷つける意図はないこと、最大限相手の立場を慮っていることを懸命に伝えあいながらも、自分の考えが相手にとっては受け入れがたいものであるという事実が皆が苦悶する様子は見ているだけで息が詰まりそうであった。ただ、今振り返って思うことは、あのヒリヒリ、ドクドクと居心地の悪い苦悶の中にこそ、対話や平和や共存の本質があるのではないかということである。

常々考えていたことであるが、こうした耳障りのいい言葉たちの実態は、とても不安定で不明瞭で居心地の悪さを感じさせるものなのではないだろうか。なぜなら、互いに納得感のある前向きな妥協点を見出すためには、個々人が自らの居心地のいい場所から少し出なければならないと考えるからである。だからこそ、安全が確保された中で、そうした不安定さ・不明瞭さ・居心地の悪さに対する耐性を養っていく必要がある。でないと、人は安直に暴力に走ってしまいうるのだと思う。

私がもし今のパレスチナやイスラエルに生まれたとして、「暴力ではなく対話で和平を」と声高に叫べるだろうか。今の日本に生まれた者として何をしなければならないかと考え続けた6日間だった。彼らと共有した時間が、彼らの涙が、彼らのハグが、そして、彼らの笑顔が、私がいつか暴力の渦に飲み込まれそうになった時に、私を踏みとどまらせる「最後の砦」になってくれるだろうと、願いを込めて信じている。



8月16日報告会のあと、プロジェクトのOB/OG、理事たち、ジャーナリストの方々と記念撮影

収支決算

収入の部

単位：円

費 目	摘 要	金 額
支 援 金 等	受取寄付金	3,196,641
	受取助成金	500,000
	参加費	2,182,300
自己資金		462,890
合 計		6,341,831

支出の部

費 目	摘 要	金 額	
旅 費	国内旅費	1,954,639	4,088,614
	海外旅費	2,133,975	
人件費	航空券代	979,794	1,524,342
	事務運営費 謝礼	544,548	
研修費	長崎原爆資料館等入館料、釣り船代	65,320	65,320
情報発信費	チラシ・ポスター製作費、 報告書（オリーブの木）製作費	156,280	156,280
通信運搬費	通信費・宅急便代、報告書（オリーブの木）発送代	60,820	60,820
消耗品費	各種生活雑貨	39,809	39,809
雑費	支払手数料、その他	406,646	406,646
合 計		6,341,831	

謝 辞

主催者 認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と
共催者 NGO ヨハネ・パウロⅡ世財団（エルサレム）は、
イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in 長崎」2025 プロジェクトの計画・実施に際し、
あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体および個人、
さらにすべての支援者・ボランティア・支援団体の方々に対し、心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構（JICA）
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
立正佼成会 真如苑
長崎大司教区：中村倫明大司教様と高見三明名誉大司教様
中村満神父様と長崎カトリック田平教会
浦上天主堂 お告げのマリア修道会
純心聖母会と「恵の丘」長崎原爆ホーム
長崎宗教者懇話会（原爆殉難者慰霊式典主催者） 吉田文彦先生（長崎大学教授）

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上 弘子
ヨハネ・パウロⅡ世財団（エルサレム）
理事長 イブラヒム・ファルタス神父（フランススコ会聖地特別管区司祭）

「平和の架け橋」プロジェクトがメディアで紹介されました

毎日新聞9月21日（日）付の朝刊1面に、大治朋子専門編集委員による本プロジェクトに関する記事が掲載されました。（右のQRコードから記事をお読みいただけます）



支援者の内訳 一般支援団体……9団体 助成団体……1団体 個人支援……177名 (匿名15名含む)

一般支援団体

アンサンブルセラヴィ平松恵子 ショファイユの幼きイエズス修道会
カトリック普天間教会 京都修道院
カトリック本渡教会井手公平神父 真如苑
カトリック水島教会 日本基督教団横浜指路教会
敬和学園高等学校 マリアの御心子女会

助成団体

三菱UFJ国際財団

個人

青木美礼	オクノクミコ	定方一悦	長尾マサ子	増田和俊
赤木啓子	小野朱美	佐藤哲雄	長崎直子	松田誠一郎
赤崎克俊	小野修	佐藤節男	中島紀史子	マツノクミコ
浅井恵美子	葛西咲子	山東史子	中島聖子	三浦和子
浅井芳和	片岡万里	下村美穂子	永廣ひろみ	三島八重子
草間俊一郎	片山敦仁	重盛宏仁	中村邦子	三國谷信子
芦川恵美子	加藤輝美	島田眞弓	賛川俊	三永典子
栗田健治	門倉昭博	シミズマリコ	西勝健夫	三谷咲都美 (NHK長崎)
アンドウオウスケ	角田和子	白井美代	野島宏幸	最上愛子
池上浩之	茅野享生	白羽照代	野村泰樹	森垣四雄
石黒朝香	川谷すず子	白柳隆明	橋本和子	森田かよ子
石黒亮	カワナミマナ	新庄幸子	橋本成年	矢田公美
石井陽子	河野悦子	進藤えみ	波多江優子	ヤマグチヤスコ
イトウコウジ	カワムラエイコ	鈴木朝美	波多野輝栄	山下靖子
伊藤元昭	川本和子	高井真悟	花田俊信	山下るみ子
イナオカヤスアキ	菊地薫	高木充子	濱本緑	山田眞輔
井上静子	北岡稔美	高島友子	濱元ヤスヨ	山田康子
井上由美子	木下博	高塚紀子	林香保里	山本勝也
今成紗羅	木村浩之	タカハシヒデアキ	原桂子	山本強
岩崎守	熊谷マリ子	高橋和子	春名三佳	吉川英子
岩田卓三	熊川光子	高島友子	春山美智代	吉田文彦
海野明根	黒田洋一	高見長崎名誉大司教	半田和巳	吉田雅子
梅田勇次	小出豊	竹川典秀	半田奈穂	吉田良子
江後紀久子	コウスサンナ チョ エステル	武田英夫	肥田みき	吉永美和子
胡美喜子	小坂田さち子	田中一子	福島由香子	吉村共介
遠藤香恵子	小林仁美	田中道子	藤原真理子	脇田輝美
大嶋茂	小山てるみ	塚田美千代	古屋恵子	和田真
大島みどり	牛来由佳	鉄野治行	坊上信子	渡辺恵美子
太田あき代	古和田恵美子	天明恭子	星昇次郎	渡邊泰男
大森アヤ子	齋藤千里	土井由乃	堀内望帆	渡辺陽子
大八木汜子	坂本直子	戸塚泰子	堀正巳	
大和四夫	櫻井茂子	TRAN THI THANH DUNG	マエシロマユミ	
岡本みどり	佐々木俊之	中尾有希	牧山幸二	匿名15件



爆心地の「亡くなった我が子を抱く母の像」の前で

「平和の架け橋プロジェクト2025」の一コマ



「恵の丘原爆ホーム」で築地重信さんの被爆体験をうかがう



吉田文彦先生（長崎大学教授）から原爆についてのレクチャー



長崎の若者たちと共に原爆犠牲者慰霊祭の準備



慰霊祭の中で各界代表の献花。平和の架け橋プロジェクトのメンバーも献花



左：コンサート会場入り口にてイスラエルとパレスチナのメンバーもガザ支援お願いのパンフを配る

右：8月12日「恵の丘原爆ホーム」でのコンサートにて始めに施設長のシスターからご挨拶。客席右側にイスラエル・パレスチナ・日本の若者たち、左側に被爆者の方々



イブラヒム神父と共に



左：イブラヒム・ファルタス神父（来客とともに）「2005年イブラヒム神父の発案で私たちの【平和の架け橋プロジェクト】が始まった」

右：エルサレム：テラ・サンクタ・スクールの幼稚園生たち

写真撮影：金子卓渡（共同通信写真記者）、森佑一（フォトジャーナリスト）、ヤクーブ・ガザウイ、田川奈美、イブラヒム・ファルタス神父（フランシス会聖地特別管区司祭）